

「進行わかるか」「身近になるか」

東京地裁の構内には3日午前、58席の一般傍聴券を求めて2382人（地裁発表）が列をつくった。並んだ人たちは、どんな思いで初の裁判員裁判を見つめているのか。

地下鉄サリン事件で夫を亡くした高橋シズエさん（62）は、午前10時20分ごろから並んだ。多くのオウム真理教元幹部らの裁判を見続けてきた。「広い法廷で、初めて傍聴したときはやりとりが聞こえず、法廷のどこを見たらよいかもわからなかった。裁判員が理解できるのか、傍聴席でも進行がわかるのかに関心がある」

この裁判がどう報道されるかにも注目している。「たまたま『第1号』になったために騒がれるのなら、遺族としては強い違和感がある。裁判員制度の改善につながるような伝え方にしてほしい」

刑事裁判の傍聴記をブログにつづってきた女性グループ「霞っ子クラブ」代表の高橋ユキさん（34）は、会社の休暇を取って、この日に臨んだ。午前10時半すぎに地裁に到着。地裁を取り囲むような行列の長さを見て、「ここまで的人数は見たことがないですね」と驚いた。

「裁判の姿がどんな風に変わるのか、その瞬間を自分の目で見たい」と話す。裁判員裁判では「被告＝犯人」という予断を与えないため、被告の手錠と腰縄を裁判員が入廷する前に外すことになり、取り付け式のネクタイや革靴型のサンダルも着用できるようになった。「見た目が変わることで、被告は少しは希望を持てるのか。それとも、目の前に市民がずらっと並んでいて、かえってやりにくいと感じるのか。被告の表情やしぐさから、読み取りたい」

4年前から裁判を傍聴してきたが、「この刑では軽すぎるのでは」と感じる人が多いという。「裁判員も私のように考えたとしたら、厳しい判決が出そうだけど、傍聴人と裁判員では、重みが違うから」と考えながら、冷静に審理を追い続けたいと語る。

市民団体「裁判員裁判を育てる市民の会」のメンバーも

傍聴券の列に並んだ。同会メンバーの早稲田大4年、小形亮太郎さん（23）は裁判員の表情やしぐさに注目する。「模擬裁判でも判決を言い渡すときは体が震えた。それが、本当の殺人事件。裁判員はどんな心境になるのか、そして司法が身近になったのか、ぜひ体験を聞いてみたい」という。

法言語学者として、各地で



東京地裁前では、裁判員制度を配東に反対する人たちが3日午前9時28分、京・霞が関、池田良撮影

制度反対の団体 裁判所前でピラ

初めての裁判員裁判が開かれる東京地裁の前には、裁判員制度に反対する団体も集まり、ピラを配った。呼び出された裁判員候補者が集まった時間とも重なり、取材する報道陣などへ行った返し

行われた「模擬裁判」の評議を分析してきた明治大准教授の堀田秀吾さん（41）は、検察官や弁護人の「話し方」に注目する。「今回の事件の被告は高齢。こうした特性を、両者がどう伝えるのか。表現や口調、強調の仕方に関心がある。それを聞く裁判員のうなずき方や表情に注目し、判断にどう影響するかを探りたい」

た。

弁護士らで作る「裁判員制度はいらない！大運動」は「制度を廃止しよう」というピラを用意。午前9時ごろから、地下鉄霞ヶ関駅から出てくる人たちに配った。呼びかけ人の一人の高山俊吉弁護士は「裁判員制度は、刑事裁判の原則から大きくかけ離れ違憲だ」と訴えた。一方、冤罪事件の支援などを行っている「日本国民救援会」も同じころから、裁判員候補者たちに「冤罪をふせぐことが大事だ」と訴え、「無罪推定の原則」や「疑わしきは被告人の利益に」などの説明を記したピラを配った。

瞬間、我が目で